

# 放送話者を目指す学生のキャリア支援

## — 大学に於けるサポートの現状と課題 —

磯野 正典  
Masafumi ISONO

長谷川 元洋  
Motohiro HASEGAWA

Career support for students aiming for broadcast speakers  
—Current status and challenges of support at university—

### 1. はじめに

放送話者を目指す学生に対しては、放送局や各地にあるアナウンス・スクールで就職講座が開催され、ここで実践的なキャリア支援活動が行われている。また、大学では就職支援講座やサークル活動に参加する学生がこれらを選択しており、実際に成果も出ている。

本研究では大学に於けるキャリア支援の視点から、放送話者を目指す学生に対して行われているサポート活動の現状と課題について考察した。

これらの背景には毎年多数の学生が難関職種である放送話者を目指し就職活動を行っているものの、その実態や問題点についてこれまで解明される事は余りなく、大学に於けるキャリア支援の重要性が高まる中、同様に注視されていない現実が存在している。

しかしながら、毎年のように東京キー局での放送話者就職試験の競争率が1,000倍を超えている現状に鑑み、大卒が採用条件となっていることから、大学に於けるキャリア支援活動の現状と課題について考察する意義が存在していると考えられる。

研究の目的は放送話者という高度専門職を目指す学生のキャリア支援の現状の把握と課題の抽出である。さらに、大学生の就職に向けた自己適性との向かい合い方の指導、広く職業選択の在り方について研究への端緒を明らかにしたい。

研究方法は大学のキャリア支援部門と各地のアナウンス・スクールの関係者、及びこれらの講座に通う学生へのアンケートとヒアリングであった。調査は札幌・仙台・東京・名古屋・大阪で実施した。アンケートは全30項目の選択方式と自由記述方式、個人を特定できない匿名方式とした。回収率は85%、アンケートの依頼は対象機関や学生への直接訪問と、郵送による二方式、回収は直接回収と郵送方式で行った。

尚、本論文では放送話者を大学卒業者及び卒業予定者で放送局に所属するアナウンサー、及び番組出演をしているフリーアナウンサー、そして、NHKが採用している地方放送局契約キャスターと定義した。また、個別の講座や局の採用などで職種名がアナウンサーとなっている場合はそのまま表記した。

## 2. 大学に於ける放送話者を目指す学生へのキャリア支援

以下に放送話者を目指す学生の大学に於けるキャリア支援の具体的な取り組み状況について調査した結果を示す。

初めに専修大学生田キャンパスでは、平成18年からキャリア支援の一環として「アナウンス講座」が開催されている。専修大学のキャリア支援活動は1年次からのキャリア形成支援プログラムを完備しており、年次毎にステップアップできる仕組みとして、資格支援と就職支援が連携し学生の希望を実現できるようなシステムとなっている。この一連の取り組みの中に「アナウンス講座」が開催されている。

この講座から昨年度までに13人が東京キー局など<sup>1</sup>のアナウンサーに採用された。講座は1年生から4年生まで全学年を対象として年間30人の定員で開催されている。一年間50コマの講座を通常授業時間帯の6時限目に実施、費用は年間4万円である。

講師は外部招聘で受講学生の男女比は半々となっている。講座を担当する就職部では通常のキャリア支援と同様に学生をコントロールするのではなく、サポートに徹するという姿勢で学生の支援をしている。今後もこれまでと同様なスタンスとやり方で継続して行くという事であるが、マスコミ業界の変化にも注視し、学生の就職先としての業界研究調査にも取り組み、情報提供をして行く事がヒアリング調査<sup>2</sup>から明らかとなった。

立教大学は歴史的に多くの放送話者を輩出しているが<sup>3</sup>、現在はキャリアアップセミナーの中に「立教マスコミ講座」が有り積極的な支援をしている。この講座は既に2017年度に15年目を迎え多くのマスコミ人を送り出している。キャリアデザイン研究所と連携した授業では特にインターンシップや各種セミナーから確実に内定するための早期対策が特徴である。

講座は7月～12月の半年間に池袋キャンパスで基本的に18：30から21：40まで、他の講座に比べると比較的長時間開催している。受講料金とテキスト代金を合わせて29,000円で定員は150名となっている<sup>4</sup>。また、パンフレットには「一般の就活生が知らない非公式の採用試験についても指導します」と記載されている<sup>5</sup>。

法政大学では「自主マスコミ講座」が開催されている。講座名に「自主」が付いているように正規の大学の授業でも、大学が開催しているキャリア講座でもない。1998年に創設されこれまでに多数の受講生がマスコミ業界に就職している。講師を講座のOBが

務めており、1年生から3年生が選抜されて参加している。費用は半期で2万円、講義は土曜日の13:30から市ヶ谷キャンパスで行われている。顧問は社会学部の稲増龍大教授である。夏休みには合宿も行われるなど活動の幅が広く、放送話者を目指す高校生の間でも良く知られている。法政大学を受験した目的がこの講座にあったことも多くの学生が語っている。

淑徳大学はテレビ朝日のアスクと連携して「淑徳大学アナウンス特別セミナー」を開催している。2017年度は8月31日から9月1日の3日間の全9コマの集中講座で、受講生の費用は1万円と通常の3日間講座に比べて割安であるが、当然同大学の学生だけを対象としている。

この他、マスコミ講座を開催している大学は多いが、過去を含めてのアナウンサー講座は学習院大学がマスコミ・広告セミナーの一環として「アナウンサー講座」、フェリス女子学院大学がキャリア形成サポートとして「アナウンス講座」、東海大学ではキャリア就職センターが「アナウンサー講座」を開催している。立命館大学の「マスコミ対策講座・アナウンサーコース」は早稲田セミナーへの参加となる外部機関連携講座である。このように大学の主催ないし関係している学生支援講座は、いずれも就職支援の枠組みの中での開催となっている。

一方、学生のサークル活動からも放送話者が数多く生まれている。歴史的にはこれら学生サークル出身の放送話者が過去において多く存在し、大学が就職講座などを開催する以前は、これらのサークル活動が就職につながり、多くの学生が就職に結びつける結果を出していた。

その中でも放送話者に留まらずマスコミ業界に多くの人材を輩出している早稲田大学には、「放送研究会」と「アナウンス研究会」があり共に公認の早稲田大学の全学組織である。アナウンス研究会は多くの学部の学生が所属しているが、志望動機や将来の目標は様々で必ずしも放送話者を目指している学生ばかりではないが、しかし、実績としては過去多くの局アナウンサーを送り出している名門サークルである。活動は多様で各種コンテストでも多くの実績を残し、実践活動として司会なども行っている。

一方、放送研究会は学内でも最大規模の学生が参加しているサークルである。各種司会やイベントの場内アナウンス、ナレーションの業務を請け負うなど実践的な活動をしている。この二つはいずれも学内の学生によるサークル活動であるが、実績から見て放送話者を多数放送局に送り出している組織としての存在意義がある。進学に当たって法政大学のマスコミ講座と同様にこれらのサークルに入って放送話者を目指すため早稲田大学を選んだ学生が多く在学している。

「立教大学放送研究会」は公認サークルで400人が所属している。アナウンス・音響・

映像などに分かれた活動をしている。このなかでアナウンス部は全体・個人でトレーニングしている。一定レベルに達すると番組制作に関わるシステムとなっている。

日本大学は現在、学部ごとに放送研究会があるが、元々は日本大学の全学組織のNBF<sup>6</sup>という組織のサークルであった。日大闘争により分裂したものの現在も発表会などの相互の交流がある。その中で「文理学部放送研究会」では現在もNBFを名乗っている。これは文理学部の前身が教養学部であった事が遠因として考えられるとともに、紛争後いち早く放送研究会が復活したという経緯も関係している。日本大学は学生数も多く、これまでに放送話者を数多く輩出しているが、その中でも過去NBFの出身者が大多数を占めている<sup>7</sup>。

この他、主だった大学には学生によるサークルとして放送研究会やアナウンス研究会があり、毎年このようなサークルから放送話者が誕生している。これらのサークルは学生サークルということから、大学当局による直接的な関わりは殆どなく、アナウンス技術を先輩学生が後輩に指導する事が多い。

最近はこれらのサークルでキー局のアナウンサーやOB・OGなどが指導に関わるケースが増えて来ている。これは自局のアナウンス講座への参加に繋がる事や、放送局による寄付講座が東京の大学では多く行われ、そこを接点として発展して来たことが背景にあると考えられる。このような連携講座は企業の事業活動の一環であり、これに関わる事は業務でもあることから、様々な活動に制約がある現役アナウンサーも参加し易くなっていると言える。

この他、アナウンサーやフリーアナウンサー、NHK地域キャスター出身の教員が個人的に指導をしているケースがあるが個々の詳細について今回は詳細な調査には立ち入っていない。しかし、これまでに以下の事柄が一般に伝えられており調査した。

元フジテレビの露木茂が東京国際大学に勤務していたが、現在の所、同大学出身の著名なアナウンサーを探すことはできなかった。一方、元関西テレビの桑原征平、元朝日放送の和沙哲郎が大阪芸術大学で教鞭を取り、こちらからは幾人かのアナウンサーが出ている。

淑徳大学では2014年に人文学部に表現学科が創設され、放送表現コースに元日本テレビの松永二三男教授が赴任している。「何としても淑徳出身のアナウンサーをつくりたい」<sup>8</sup>と述べていたが、ここ数年間に同大学からアナウンサーの就職実績は公開されている情報にはなかった。

これら専任教員として学生の指導にあたる元アナウンサーとは別に、非常勤講師として教壇に立つ元アナウンサーは多い。しかし、これらの非常勤講師が何か目立った成果を上げたという事は一般に伝わっていない<sup>9</sup>。これらの非常勤講師は停年退職後などに

大学関係者から乞われて授業を担当することになるが、依頼する方が単に元アナウンサーという肩書きで採用するケースが多く、その人の実績や教育能力を精査して選ぶことは殆ど無い。

この状況は偏に依頼する大学側に起因する。また、これらのベテランアナウンサーだけでなく、最近はいわゆる女子アナウンサーやフリーアナウンサーなどが放送現場での仕事が少なくなり教育現場での仕事を求める傾向があり、売り込みも非常に多くなっている<sup>10</sup>。しかし、一部の卓越した女性アナウンサー出身者<sup>11</sup>を除けば、そのほとんどが単なる個人の経験や感覚的な指導をしているケースが見られ、成果も極めて不透明である。これらの人々は就職講座やマナー講座などのキャリア講座として大学との接点を持ちつつ、その延長上で非常勤講師となることが多い。ここにも大学側のいわゆる「見る目」に問題がある事が上げられ、大学の対応に起因していると事が考察できる。

また、学生が放送話者を目指すきっかけとなる取り組みとしては、これらの人々がアナウンスに関わる一般的な各種講座・教室で講師を担当する朗読・音読・読み聞かせ・話し方・マナーなどの講座がある。ここでの指導もいわゆる教室も的的な枠を出ていないものが多い。また、現役アナウンサーが業務として行っている音読や朗読の指導は素人相手の初歩<sup>12</sup>レベルのものが多い。これは各局に於いてアナウンサーの社会貢献活動の一環として取り組まれている活動をカスタマイズしたものであるが、アナウンサーとしての専門性や教育的観点からの指導をしている事を明らかにしている訳ではない。

東海地区で音読の指導をしている現役アナウンサーは、音読が健康にいいという論理や脳の活性化につながるというロジックを展開している<sup>13</sup>。しかし、これは担当者が自ら研究・実証したものではない。更に、パフォーマンス的要素を取り入れる講義や実習で人を惹き付けることもあり、朗読や音読を長年研究・指導をしている専門家はパフォーマンス朗読の要素が強いと評している<sup>14</sup>。

これらの取り組みはCSR業務として担当する事から、自社や関連メディアに取り上げられ一般の目に付く機会が多く、これをきっかけに学生が指導を受け、その延長上にアナウンサーを志す事もある。オープンキャンパスなどで放送話者を志望する学生の中にはこれらの指導がきっかけとなっていると話すケースもあり、単なるパフォーマンスや芸術表現手段を学んだ事がメディア企業へ就職する事に直接はつながらないという理解は学生には無い。

大学入学後、これらの学生が放送話者を志望した場合には、当然のように大きなズレが当初から起こっていることに気づく。当然、これらの教室での指導が学生の進路に大きく影響することは配慮されていない。結果として放送話者志望者を誘導している傾向が見て取れる。

また、非常勤講師は学生の将来に責任を持つ必要性もないことから、類似した指導や導引が大学内でなされる事となり十分に注視する必要がある。しかし、現状では教員の授業における指導に介入することをタブー視する慣例があり、なかなか悩ましい問題として課題が残されているのが現状である。

以上の現状分析によって、放送話者を目指す学生を取り巻く状況や現実の課題も徐々に明らかとなって来た。しかし、ヒアリングによれば、賢明な学生の多くはこれらの非常勤講師などのレベルを客観的に評価し、かつ、授業に於ける指導をも取捨選択する能力を発揮している。場合によって、これらの指導を是々非々主義的に受講している学生もいる<sup>15</sup>。

ただ、この様な現実問題は殆ど大学内では知られておらず、どう認知されどう改善して行くかも、今後大学で取り組む問題であるのかも含めて状況課題として残されている事が明らかとなった。

### 3. 放送話者を目指す学生の調査結果と考察

本研究では全国の各種アナウンス・スクールや大学でのアンケート・ヒアリング調査とともに、これらの講座に通っている学生に同様の調査を実施した<sup>16</sup>。以下はそれらによって明らかとなった学生の実態と意見を元に考察する。はじめに放送話者を目指す学生の志望タイプを以下の様に分類した。

- (1) 確信型・比較的早い時期から目標を定めて大学進学やダブルスクールを行い、試験では全国各地の局を受験して留年や就職後も挑戦するタイプ。局アナになれない場合はNHKキャスター職・契約アナウンサー、リポーターを目指し、マイナーメディアにも挑戦する。
- (2) 挑戦型・大学進学後に何かのきっかけで放送話者を目指し、一定の手応えを感じながら徐々に自己実現と結びつけるタイプ。途中でうまく行かない場合は比較的簡単に諦めて他業種へ就職する。
- (3) 思いつき型・単純な憧れ、視聴者目線で放送話者を目指す。自己の客観分析や必要とされる資質・技能についての知識が希薄。エントリーシートが全て通らず、キー局だけ思い出受験して終わる。当然地方局を受験する意欲は薄れ諦める。

調査対象はこのうち大多数が(1)の学生であり、一部(2)の学生がいた。よって、結果には一定の共通性が見て取れた。まず、共通する事は、ほぼ全ての学生が放送話者になる事をメインミッションとして学生生活を送っている事である。そして、同様に新卒で就職出来なかった場合は留年し、就職しても再度挑戦する事や、目標を変えてNHKキャ

スター職やコミュニティ放送などでのアナウンス活動を目指すということである。

つまりこれらの学生は「放送話者になることを人生最大の目標として、それ以外の職業に就く事は一切考えていない」という事になる。しかし、これは調査時に3年生以下及び試験を受ける前の4年生を対象としており、採用試験の結果が出た時には変化して行くものと考えられる。要は現時点での意気込みと捉えておいた方が良いと分析できる。

表1 アナウンサーを目指す学生へのアンケート結果

N=345

<b>Q アナウンサーになる動機付けときっかけは何ですか</b>
子供の頃からの憧れ・話す事が好き・先輩に勧められて・天職と思い挑戦しないと後悔する・身近にアナウンサーがいたから・親戚にアナウンサーがいて資質があると思った・競争率が高くリスクのある事に挑戦したいから・人との関わりのある仕事をしたいから・言葉で伝える事に興味があるから・言葉に無限の可能性があるから・自分のやりたい事と確信したから・情報を発信する立場になりたいから・テレビ番組を見て・人生をかけてやる仕事だから・東日本大震災でアナウンサーの役割の重さを知ったから・子供の頃から素質があると言われ続けたから・北陸にある局の知性も教養もない某アナウンサーでも採用されているから・お笑い芸人など容姿に関係なくトークで勝負できる時代だから・セレブの一員になれる可能性があるから・安定した職業だから
<b>Q アナウンサーに求められる資質にはどのようなものがありますか</b>
情報を伝える技術・物事を公平に見る能力・事実を正確に伝えられる能力・感謝の気持ちと謙虚に姿勢・華やかさ・清潔感・ニュースを正確に伝える技能・一人で努力する姿勢・表裏のない人間性・表現者としての言葉使いが出来る事・頭の回転の良さ・性格の明るさ・スピーディーな情報処理能力・ニュースや原稿を一気に読み上げる能力・正義感・反骨精神・豊富な知識
<b>Q 目標とするアナウンサー像はどのようなものですか</b>
信頼感と親近感・信頼感あふれる人間・想像力を視聴者に高められるような力量のある人・バランス力のある人
<b>Q アナウンサーの責務とは何ですか</b>
情報を伝える人に役立つ事・信頼感を醸し出す事・自分の行動に責任を持つ事・誠実さ・続ける事・ニュースを伝える事・視聴者視線を忘れない事・誇張しない事・人の役にたつ事
<b>Q アナウンサーを目指すために通っているスクールや講習会で役立つ事・希望は何ですか</b>
短所の改善と強みの発見・細かい指導がためになる・弱点の指摘と克服法指導が役立つ・最高度なエントリーシート指導が役立つ・個別のカウンセリング・メイク指導をして欲しい・腹式呼など基本的な事から学べる事が評価できる・音大音楽科なので発声方法・実践方式の授業を期待する・詳細な受験情報を期待する・共に学ぶ仲間は貴重・発声練習が出来る環境がある事が貴重・授業外でも質問や相談に対応してくれる体制がありがたい・一人一人にカスタマイズした指導が役に立つ・指導は現状で満足しているが全てを獲得できていない・原稿読み、フリートークなど多義にわたる指導が役立つ・精神論よりも実践論で指導して欲しい・人間として成長した・日常的な発見がある・試験で自分らしさを教えて欲しい・実践的な指導をして欲しい・伝える事の意義を学んだ・フリートークを更に学びたい・目標に向けた意識が向上した・全てのスキルが高められた・アナウンサーになったからの事をもっと教えて欲しい
<b>Q 大学の授業で役立つ事や就職指導で役立つ事については何ですか</b>
情報がないので余り無い・キャリア支援の講座・教養を身につける事は役立つ・アナウンサー育成に特化した指導はない・環境系授業で視野が広がった・アナウンサーの就職は対象外・経済の授業がニュースを読む基礎知識となった・大学での就職講座はテンプレートなので役立たない・アナウンサーのOB講座がとて役立つがそれ以外は何もない

※ アンケートでは学生向けに放送話者をアナウンサーと表記した。

これらの結果を見ると、放送話者を目指すきっかけは他の職業選択と余り変わりはなく、憧れや各種メディアとの接触機会によるもの、また、言葉を使った職業に対する興味というものが多かった。今回の調査で特筆すべきものとしては、レベルの低い人材でもアナウンサーになれるという回答や、お笑い芸人との対比。職業としての安定性や将来セレブになれるという回答である。

求められる資質や目指すアナウンサー像については、将にアナウンサーに求められるものと符合しており、この点は学生が適切に認識をしている事がわかる。

しかし、放送話者の責務に関しては、回答が未記入であったり、個人の資質や仕事の性質に言及したものが殆どであった。放送の社会的責務や放送法の理念など、本来マスメディアに関わる人間が知っておくべき事柄についての記述はなかった。大学でマスコミ論やジャーナリズム論を学んでいる学生からもこのような回答は無く、これらの事柄はアナウンス・スクールでも指導される機会も無いであろう事からこのような結果が出ていると考察でき、大学で学ぶ幅広い教養項目として今後の大きな課題と考えられる。

また、アナウンサーのレベル低下やプロ野球選手との結婚によるセレブ生活を希求するなど、軽薄な動機が実際に書かれた事は本音としては多少理解できるものの、実際に表記されるとは考えられなかっただけに新たな発見であった。

一方、スクールや講習会における満足度は高く、具体的な指導が自分の成長に役立っていると評価している。また、大学に於ける就職指導については目立った評価は見られなかった。

しかし、一部の大学で実施されている現役のアナウンサーによる指導では高い評価があった。これも技能的な指導に対する評価である。

#### 4. 放送話者に求められる人材と大学教育

一般に放送話者として採用される場合に求められる人材には、一定の共通要素が存在している。これを採用する側の各局のアナウンサーや人事担当者は次のように上げている。いずれも「マスコミ就職読本1. 入門編20に掲載された「アナウンサーとしてどんな人材が求められているのか」から引用した。

NHK 人事部副部長の平匠子は『「幅広い好奇心」と「粘り強い取材力」、そして、「事実をわかりやすく伝える力」など、まさにジャーナリストとしてのセンスそのもの、放送の最初から最後まで関わることができる点では、ある意味究極のジャーナリストとも言えるかもしれません』<sup>17</sup>としている。

また、テレビ朝日総合編成局アナウンス部の田畑祐一は『アナウンサーとは、「伝えたい物事」を「伝えたい相手」に「正確かつ具体的に伝える」ことが出来るスペシャリ

ストです。その目的を達成するためには、物事を正確に捉える常識と感性が必要であり、また、多くの人に共通理解してもらうための常識的で普遍的な表現能力が必要となってきます』<sup>18</sup>。と語っている。

更に、テレビ東京編成局アナウンス部長の斉藤一也は『第一印象で引きつける魅力。特定のジャンルに精通した知識・経験。あるいは魅力的な声質。コミュニケーション能力・反応の良さ。発想の良さ・・・など』<sup>19</sup>。と語っている。

一方、筆者のヒアリング調査によれば、以上の人々とほぼ同じ内容の指摘が長らくアナウンス業務を担当し指導的立場で採用に関わった人たちによってなされた。ヒアリング対象者は、フジテレビで系列各局を含め多くの指導を担当したフジテレビ永島信道元アナウンス室長、関西テレビの毛利八郎元アナウンス部長、北海道文化放送でアナウンス講座を担当している山田英寿アナウンサー、仙台放送アナウンサーから海外特派員を経験し現在、仙台大学の佐々木鉄男教授、富山テレビの小山憲一アナウンサーである<sup>20</sup>。

いずれも長らく放送現場で放送話者としての経験を積んだ人たちである。これらの人々の話を総括すると、放送話者に求められる資質とは、「幅広い教養とジャーナリストとしての資質、卓越した表現能力を持ち、放送の公共性と責務を認識している人材」という事となる。

放送話者を目指す学生が学んでいる講座やスクールのテキストにも求められる資質や日頃の取り組みについても同様な事柄が書かれている。

アナウンサー養成で最も歴史のある東京アナウンスアカデミーの「アカデミー読本」には、「声は人なり」<sup>21</sup>、また、フジテレビ系列のアナウンサーが学ぶテキスト「声は人なり」、テレビ朝日のアスクのテキスト「信頼されるアナウンサーであるために」<sup>22</sup>では、「ことばは人なり」と良く似た表現でアナウンスメントの基本を人柄に重きを置いていることがわかる。

そして、この人間性の尊重を具体的にテキスト内の指摘から抽出してみると、上記の人たちによる総括と一致している。また、民放各局は創成期にNHKから多くのアナウンサーが移籍したことから、これらの考え方の基本は、NHKのアナウンサー教育に基づいている事は明らかだ。

ここには戦後NHKが目指した民主主義社会の発展に資する事、言論の自由の確保、そして、国民文化の向上に寄与するという放送の理念が根本に存在している事が分かる。これらの理念を放送話者として業務に於いてどのように実現して行くかの指標が、これらの言葉になって連綿と受け継がれてきている訳である。

一方、大学でのキャリア教育は、2011年の大学設置基準改正に当たり全学的に取り組むことが示されている。しかし、現実にはキャリア教育の位置づけは曖昧で殆ど全ての大

学で科目として取り組んでいるものの、職種別の指導や成果を明確に位置づけた形で組み込んだものは見られない。実態としては専門的スタッフの不足と教員意識の希薄さがあり、かつ、全体コーディネーションによるマネジメントが不在である。具体的には教学と就職支援活動の分断現象として現れている。

放送話者を目指す学生達の多くは大学の支援にも指導には余り期待していないことがアンケート調査から明らかになっている。教学面では一般教養が身に付くとはしているものの、それが直接就職に役立つとも考えてない者が大多数である。しかし、マスコミやジャーナリズムの授業に対する評価は高く、特に現場経験のある専任教員や非常勤講師からの指導が就職活動や将来に役立つと評価している。

また、キャリアセンターなどによる就職支援活動に対しては、指導が一般企業向けとなっていて到底放送話者の採用試験向けでないことを主張していた。つまり、大学におけるキャリア教育では放送話者に向けた支援講座は開催されているものの、それは通常の大学教育とは分断されたテクニック修得講座として学生は意識しており、このような意識が学生間に共有されている事が明らかとなった。

しかし、「ひらく 日本の大学2017」<sup>23</sup>の調査結果によれば、大学として重視している事の中では、特に私立大学の全てが「教育の充実」を上げ、具体的には「職業能力育成重視」「教養・人格形成重視」を選択している。つまり、社会や地域に出た時に、即戦力として活躍できる職業能力を育成するために教養や人格の陶冶を目標としている。

こと放送話者を目指す学生に対する大学の対応は、調査結果にある大学の職業能力重視方針に対して、現状のほとんどの大学で直接的な対応がなされていない事が見て取れる。そして、いくつかの対応をしている大学に於いても、それは外部講師による講座であることが殆どであり、内容にキャリア支援の職員や教員が直接関わっているということはないのが現状である。

放送話者に求められる基礎要件が「幅広い知識と人間的な魅力」という「教養と人格の陶冶」の成果であるとするれば、将に現在の大学が第一に掲げている重点教育と一致している事に注目したい。

## 5. 総括と考察

本論文では放送話者として就職を目指している学生の実態調査を行い、その実情を明らかにした。しかし、全国の大学に於ける放送話者志望者の全体を把握する事は不可能であった。放送話者になるには様々なルートがあるが、現在、多くの学生が東京キー局や地方局が開催しているアナウンス・スクールや各地にある同種のスクールに通っている事が調査で明らかとなり、これらの学生に注目した。そして、夏休みに開催される各局

のインターンシップに参加する事が採用につながるチャンスと認識し、就職活動のスケジュールを定めている事が明らかとなった。

各種アナウンス・スクールでは放送話者として採用されるための様々な指導をしているが、東京キー局・地方局では現役アナウンサーによる指導が、これに類する各地のスクールでは元アナウンサーや各種メディアでの放送話者体験者が指導を担当している。カリキュラム的には同様な傾向があるものの、それぞれの特徴を活かした指導をしている事もわかった。

しかし、学生がこれらのスクールを選択するための情報は画一的かつ、営業的なものであり、どこのスクールに行くのか、誰の指導を受けるのかによって結果が左右されるという側面が存在している事も明らかとなった。

放送話者を目指す者は現役の大学4年生であることが殆どである。とすれば大学に於けるキャリア支援の対象者としての扱いが必要になって来る。しかし、現状では放送話者という職業の特殊性や、その支援が外部機関に委ねられていることから、大学に於けるキャリア支援が充実しているとは言えない事実が今回の調査と学生からのヒアリングで明らかとなった。

大学のキャリア支援担当者の中には競争倍率が高い事から、学生ににべもなく挑戦する事を諦めるような指導をする場合もあるという事実が判明し、いわゆる一般論でしか対応していない傾向が明らかとなった。

就職活動は如何に自分が就きたい職業を明確に定めていても、採用されなければそれを実現することはできない。そして、採用試験は様々な要素が絡み合って合否が判定される。そして、そこに至る準備や学修も多様であり、学生自身の能力や経験のみならず、採用する側の事情や運のような不確定要素までが影響を与えて来る。これらの予測できない状況の元に学生は就職試験に臨む。

取り分け放送話者の試験はこのような要素が非常に複雑に絡むとともに、競争倍率が極めて高く、殆どの学生が望みを果たす事なく敗退して行く厳しい戦いが繰り広げられている。

大学が行うキャリア教育の究極の目的は「社会に出て働くための知識と能力を獲得し、業務に於ける課題を克服できる意思と、その力をすべからく身につけさせる事」と言える。そして、放送話者の業務に就く学生に求められるスキルは、幅広い教養に裏付けられた知性である事を多くのアナウンサー経験者が語っている。

実はこれらの事柄はリベラル・アーツの概念と一致している。そのような意味で放送話者の志望者に対する大学に於ける教育とキャリア支援の重要性と意義を本研究は明らかしたと言える。

そして、具体的方策としてキャリア支援の大学職員と教員による連携、どのような職業に就いた場合でも役立ち、それを活かす事の出来る一般的教養の修得と活用、そして、専門科目に於ける深い洞察力や分析力の獲得が必要と考えられ、これらを学生に伝授する必要が生じている。

大学に於ける教育は広く社会に於いて有用な活躍が出来る人材の教育に他ならず、しかも殆どの大学でこの事を重点項目に上げている。そして、キー局のアナウンス・スクールの責任者の中にもアナウンサーになれるのは一握りの学生だけであり、一般職に志望先を切り替えた場合に有効な講座内容にしていくという認識で実際に取り組んでいる事が明らかとなった。

であるならば、これらの取り組みをより具体的な形で押し進めることが急務であると考察できる。さらに、社会情勢の変化や学生のニーズに対応すべく大学の変革が急激に進んでいる。このような状況下、進学希望者に選ばれ、就職を希望する学生の希望に応えるためには、今後、教育ニーズの調査検証と、これまででない個別的教育プログラムの実施が求められると結論づけた。

## 6. 今後の研究課題

本研究をきっかけとして、さらに多くの課題が明らかとなっている。例えば、殆どの学生は放送話者として採用されること無く一般企業に就職するが、その様な学生を対象にした追跡調査は今までなされていない。また、採用試験での詳細な選抜基準、局全体での放送話者の採用や人材育成に関する指標などは明確にはされておらず、特に専門技能の評価は担当者や専門部署の裁量に委ねられている事が多く詳細はよく分かっていない。

また、大学に於ける放送話者の試験に対する基本的な認識や、今後の対応についても個別具体的な調査は未だ不十分である。さらに、個別の大学教員が放送話者の様な特定職種 of 難関就職活動に取り組む場合の学生への対応に関する調査も手付かずの状態である。

このように本研究では多くの課題が次々と上がっており、今後、可能であれば研究機会を作り解明に取りかかりたい。

## 7. 謝辞・参考文献

今回の研究では多くの人たちからアンケートとヒアリング調査の協力を頂いた。特にフジテレビ系列のアナウンサーやフジテレビアナトレ、テレビ朝日アスク、北海道文化放送アナウンサー講座の皆様、専修大学、早稲田大学、日本大学の関係者には業務多忙

の中、貴重な時間を賜わり感謝に耐えない。また、放送話者を目指す学生諸君多数によるアンケート・ヒアリングへの協力は非常に参考となり心から御礼申し上げる。

筆者は40年前に放送話者を志して、大学の放送研究会と東京アナウンスアカデミーでその道を目指す準備をした。大学では当時サンケイ新聞論説委員であった小山房二先生（後、外交評論家）に久しくご指導を賜った。当時、先生は新聞社に籍のある兼任教員であったが非常に熱心な指導をされ、特にジャーナリズムの何たるかをご自身の体験を元に熱く語って頂いた。

放送話者をを目指す学生の現状の把握と、大学でのこれらの学生に対する教育をどのようにしていけばよいのかは、現役の大学教員としての大きな課題である。放送話者をを目指すことは正面から自己と向き合い、そして就職活動に真剣に取り組み自己実現と意義ある社会的活動を確立させる事である。

そして、基本にあるものは大学で学んだ知識や問題意識をどのように発展させ深化させて行き、それを社会に出てから如何に職業として実践して行くかという事に他ならない。今回そのような意味では本テーマは限られた範囲の中ではあるものの、大学教育の示すべき方向性を具体的に模索する研究である事を確認することが出来た。

この成果が放送話者を志す学生及びその他の高度専門職種を目指す学生諸君の一助となれば幸いである。ご指導ご協力を頂いた皆様方に感謝申し上げ謝辞の言葉とする。

（磯野）

## 注

- 1 2009年日本テレビ、2010年静岡放送、2013年南海放送、2014年山梨放送、高知さんさんテレビ、2015年テレビ山口、NHK、2016年フジテレビ、沖縄テレビなど。
- 2 2017年10月19日、生田キャンパス4号館就職部で、岩瀬文人課長、藤橋美検課長補佐、高尻康博主任から。
- 3 文化放送の土居まさる、みのもんた、日本テレビの徳光和夫、フジテレビの川端健嗣など。
- 4 立教大学マスコミ講座、立教大学キャリアアップセミナーガイドブックから、2017年現在。
- 5 立教大学マスコミ講座、立教大学キャリアアップセミナーガイドブック P58表下13行目。
- 6 Nihon University Broadcasting Federation
- 7 テレビ朝日・山崎正、北村元、青森放送・蔦谷信弘、東北放送・安田立和・平野勝男・鈴木俊光、テレビ山梨・佐藤泰男、静岡放送・秦朋子、北海道放送・若山晶子、北陸放送・沼田憲和など。
- 8 日本私立大学協会教育学新聞教育学術オンライン第2558号 2014年4月2日、P2 9行目
- 9 名古屋で長らくアナウンサーだった人が市内の大学で授業を担当したが、指導した学生がアナウンサーになったり、研究をする事もなく目立った成果は上げていない。
- 10 著者が勤務する大学にはキャリア支援センターや著者に対する売り込みが多数ある。
- 11 現役中に成果を上げる事ができた人は引き続き放送業務に関わる事が多く、指導教育での仕事をする必要は無い。

- 12 朗読や音読などは個人としての言語表現要素が入るため、そもそもパブリックスピーキング技法であるアナウンスメント技術とは異なるものである。ただし、発声・発音・調音等の基礎的な部分についての共通性はある。
- 13 2017年11月11日「介護の日」愛知県名古屋市中区栄四丁目の中区役所での「介護まつり in 2017」の講演会第1部「新聞音読で脳を活性化しよう！」の講演の中で、「音読は脳の活性化につながるということが科学的に証明されている」という主旨の講演を行なった。
- 14 朗読研究者として長年指導をしている元局アナウンサーによれば、内容的には感覚的指導や音楽を用いた効果を用いており、理論的な解説や指導はなされなかったという受講生からの話を語った。
- 15 中部地区の大学で担当の女性フリーアナウンサーが複数回講義を休講した。更に補講を一日に数回設定し尚且つ、これを反故にしたため、受講生が大学に抗議したが学生はそのような事をしそうな講師だと語った。
- 16 2017年5月から2018年1月まで、札幌・岩手・東京・名古屋・富山・金沢・大阪・福岡・沖縄で志望動機など25項目についてアンケートを実施、全345人からの回答を得た。
- 17 「マスコミ就職読本1. 入門編2018」P119 2段目2～9行。
- 18 「マスコミ就職読本1. 入門編2018」P123 1段目16行～2段目5行。
- 19 「マスコミ就職読本1. 入門編2018」P124 1段11～14行。
- 20 ヒアリング調査は2018年11月4日に東京お茶の水の会場で実施し、かつ、その後も複数回個別に行った。
- 21 「アカデミー読本」1974年8月30日第5版 はじめに 大西雅雄の言葉。
- 22 「アナウンス教則本《実践編》」2009年8月 P1 テレビ朝日アナウンス部長 松苗慎一郎の言葉。
- 23 朝日新聞と河合塾が全国国公立大学751校を対象に2017年の夏に実施した調査。664校からの回答があった。

## 参考文献

- 北出真紀恵（2011）フリーランスとライフキャリア・フリーアナウンサーを事例として 東海学園大学研究紀要 第16号 PP65-80  
（2012）地方局アナウンサーのキャリア発達に関する予備的考察 組織のなかでアナウンサーを生きることの意味 東海学園大学研究紀要 第17号 PP63-75
- 鈴木健司（2007）アナウンサー（局アナ）派「タレント」か「専門職」か 新・調査情報6号、PP24-27
- 創出版（2017）「マスコミ就職読本1 入門編2018」「マスコミ就職読本3 放送編2018」  
フジテレビ アナウンサーテキスト「声は人なり」  
テレビ朝日 アスクテキスト  
東京アナウンスアカデミー アナウンサー読本
- 小川 洋（2017）「消えゆく限界大学 私立大学定員割れの構造」白水社

※ この研究は、金城学院大学人文・社会科学研究所2017年度共同研究プロジェクト助成を受けて行われたものである。